

平成26年度霞ヶ浦学講座 第12講 結果報告（要旨）

実施日時：平成27年2月8日（日）13:30-15:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：沼澤 篤（霞ヶ浦環境科学センター嘱託） 参加者数：51名

テーマ：「霞ヶ浦の歴史1 ー古代～近世（乱世に躍動する人々ー常総の内海世界）」

要旨：霞ヶ浦の人文的な歴史（通史）は未だ集大成されていません。古文書、出土品、発掘品、民具などの史料に基づいた詳細な研究報告は各専門家によってなされていますが、「霞ヶ浦の歴史」という視点が弱く、体系的に全体像を把握することは今後の課題です。

文字が使われていなかった古代の霞ヶ浦周辺における自然と人間社会の状況は、貝塚や古墳の調査によって明らかになりつつあります。奈良時代の様子は、幸い常陸国風土記の記述によってかなり具体的に知ることができます。それらに依れば古代常陸国は、水陸のサチに恵まれた豊穡の地（常世の国）であったことがわかります。当時まだ霞ヶ浦という呼称はなく、水域ごとに香取の海、行方の流海、佐我の流海、信太の流海などと呼ばれていました。鹿島神宮は大和王権の東国開発の祭神として位置づけられ、国府（現在の石岡市）は、陸奥平定の重要な兵站拠点でした。

中世（平安、鎌倉、南北朝、室町、戦国）の霞ヶ浦沿岸地域は、動乱の時代にあって、人々は各地の津に拠って、漁撈、水運による商い、湿田農業に勤しむ一方、中央と地方の権力や寺社の緩やかな支配を受けながら、課税根拠が未確立で住民移動の規制も弱かったことから、比較的豊かな暮らしを営み、自由で磊落な気風を培っていたようです。西日本と異なり中央の統治権力が東国に及びにくい地政学的背景があるものの、平将門の乱、鎌倉幕府・北条氏の支配、南北朝の動乱、戦国期を経て天下統一への過程に、常陸国・霞ヶ浦周辺も巻き込まれました。一方、海夫などが躍動し、人、物資、情報、文化が縦横無尽に交錯する「常総の内海世界」とする位置づけが可能であることが、網野善彦、市村高男らの研究によって明らかになっています（県立歴史館シンポジウム、平成18年）。それは地中海や瀬戸内海世界と通底するところがあり、いわば霞ヶ浦は「ミニ地中海」でした。

近世に入ると、統治権力（江戸幕府）が封建体制として確立し、江戸が政治経済の中心となり、商圈に組み込まれた霞ヶ浦沿岸地域は、高瀬船による水運が隆盛し、物資や人の移動によって、江戸文化との交流が盛んに行われ、土浦、江戸崎、小川、高浜、潮来などの主要な津は河岸としておおいに賑わいました。伊勢商人、近江商人が霞ヶ浦沿岸に大店（おおだな）を構え、常陸の物産（米、醤油、清酒、薪炭等）を江戸に運び、帰船には下り物の呉服、雑貨品、銚子のメ糟、干鰯などを積み込み、活発な商いを行っていました。それらの経済活動は明治期を経て今日まで繋がっています。沿岸の津は次第に水戸藩や幕府の支配下に置かれ、海夫の子孫による自治は弱体化していきました。

一方、江戸幕府による利根川東遷の影響を強く受けた霞ヶ浦地方は水害常襲地帯となり、土砂の堆積が進み、各地に洲が出現し、新田開発と開拓民の定住化が促進されました。それらは今日の築堤、干拓、土地改良、霞ヶ浦開発へと繋がっていきます。